「湖に星の散るなり」と「時潮の波の」

歌詞に見る「うるわしきまことの道」の意味するもの

湖に星の散るなり

（昭和十六年寮歌）

切替辰弐君作歌

一

湖に星の散るなり幽けさよ松の火燃えて
漕ぎ出づる愛奴の漁舟の岸辺佇ち沁々眺む
旅の日ははや暮れゆきぬ夢に酔ひ夢にぞ歎かん
汚れなき心を慕ふ大いなる支笏の湖よ
花若く我汝が許に
希望満ち今宵宿らん

二

轟けるかの雄叫びよ創造の歴程一路
新しき使命に捧ぐ幸の今日にしあれば
忍苦して欣求むるところ得べくして得べからざりし
秀麗はしきまことの道ぞ近くして遙かなる哉
若き世の秩序を背負ふ
洋々の日と倶にゆかなむ

三

乾坤に伏し祈るなり栄光あれ祖国の生命
決意する光眩ゆく手に取りぬ楡の嫩葉
葉脈の強きを讃ふ草々のたふれ生れて
春青み辛夷咲くなり逍遙の原始林蔭清く
暢び行かん我が民族の
逞しき息吹き感じぬ

四

立て歩め光の中を国民の重き責任負ひ
燦めきの星辰は語らひ微香る大地嚠きぬ
甦生へる征覇のいくさ祝歌ふ吾等が双頬に
失はじ高きが矜持護り来し伝統の法火
浄らかに燃え熾る刻
継ぎ行かな来ん若人に

一高寮歌を始め、旧制高校の寮歌には護国調の寮歌が多いが、恵迪寮寮歌に護国調の思想詩は少ない。あっても叙景詩・抒情詩の一部、哀調を帯び勇ましくない。

「湖に星の散るなり」はその例である。

1番　抒情詩、叙景詩

2番の「新しき使命（戦時の国民の使命）に捧ぐ幸」と護国詩的表現があるが、

「忍苦して欣求るところ得べくして得べからざりし　秀麗はしきまことの道ぞ近くして遙かなる哉」：得られそうで得られない「秀麗はしきまことの道」とは

3番「栄光あれ祖国の命」「我が民族」（護国詩的文言）

4番「国民の重き責任」「征覇のいくさ」（護国詩的）についで、「失わじ高きが矜持　護り来し伝統の法火浄らかに燃え熾る」「継ぎ行かな来ん若人に」何を求め、何を大切にし、何を護り伝えようとしたのか。

この年、日本は米国に宣戦布告

時潮の波の

（昭和二十一年寮歌）

渋谷富業君作歌

序

厳しかる道に仕へて　限ある玉緒惜しむ
げにさあれ深き因縁の　魂ゆする生命の饗宴
汲まざらめや残の月に　旅の朝早くは明けぬ

一

時潮の波の寄する間を　久遠の岸に佇みて
不壊の真珠を漁りする　嗚呼三星霜の光栄よ
緑の星を夢む時　疎桷を払ふ天籟は
秘誦の啓示語るなり

二

孤窓に流る星屑に　無辺の調律訪へば
測りも知らに底つひゆ　言の葉洩れて伏し祈る
奇しく貴き生命をば　友情を讃ふ歌声の
溶け行く方に馳するかな

三

朽葉ゆらぎて湧き出づる　楡の林の真清水に
己を責めて泣く友の　孤杖を運ぶ逍遥や
遠き誓ひの日を偲び　虚しき春に嘯けば
淡れし影の寂寥よ

四

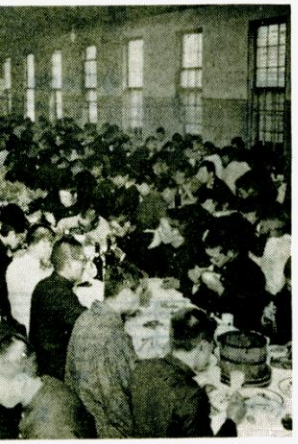
宿命の道を行く身にも　友を誇らん花莚
銀燭頬涙を照らす宵　沈黙に語る歓喜よ
心を交し思ひ酌み　団欒にふるふ共鳴は
胸の小琴を掻き鳴らす

五

北斗頭上に影冴えて　神秘の息に吹かれつつ
肩組み歌ふ旅の子を　染むる伝統の篝火よ
暮るるに早き青春の日の　追懐を込むる此の盃を
汲まん今宵の記念祭

結

近きかな楡陵を去る日は　還り来ぬ足跡愛しみて
ひたぶると打笑む時ぞ　求めつつ得べからざりし
秀逸しき真理の道は　はろかなり我等が前途
進まざらめや



「時潮の波の」は5年前の「湖に星の散るなり」を受けている。

5番：「伝統の篝火」　「湖に星の散るなり」の4番には「伝統の法火」

「結」：「求めつつ得べからざりしうるわしき真理の道は　はろかなり我らが前途　進まざらめや」

「湖に星の散るなり」2番の「忍苦して欣求るところ得べくして得べからざりし　秀麗はしきまことの道ぞ近くして遙かなる哉」と重なる。戦時の「湖」では「遥かなる哉」と慨嘆で終わっているが、戦後の「時潮」では「進まざらめや」でおわる。進むことができる時代になったので、進もう。

彼らは何を後輩に伝え、何に向かって進もうとしたのか。
それは、言わずと知れた札幌農学校の伝統精神、「貴き野心の訓え」であろう。